
The Brave is warm-hearted.

美波可奈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Brave is warm-hearted.

【Nコード】

N8278E

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

優しい勇者は誓う。この世の中を良くするって。

聖剣を手に入れて 1

俺はピーシアさんに嘘をついた。

俺の家族は生きて地底で暮らしてるって。

心配かけまいと思いい口からでまかせを言った。
後悔しても遅かった。

ピーシアさんは安堵の表情を浮かべたから。

本当は俺は復讐の鬼みたいになっていた。

あなたに会うまでは。

魔族は根絶やしにするべきだと勇んでかねてから噂の在ったあなたの所に来て。

あなたの寝首をかいてやろうと本当は思っていた。

だけどあなたは全然生き延びる事に無頓着で。

むしろ死に急いでるように見えて。

あなたの部下のリクみたいに無鉄砲に俺の聖剣に触らないで。
そして何より俺の目の前で眠ったんだ。

薄い茶色の瞳を閉じて。

あなたは静かな寝息を立てた。

俺は寝たふりをしてあなたの様子を伺っていたんだ。
リクという従者を失って。

俺を殺そうとするんだろうと思っていたから。
だから敢えて隙を造ってやったんだ。

そしたらきつと本性が判るだろうって。

そして何より眠った振りをした俺にケットをかけてくれた。

それは手作りのあなたが生業にしてるパッチワークのものだった。

俺の頭にこだまする。

あなたが言った言葉。

「私は無理に生きようとは思わないし。

貴方に刺されるのが本望だと思う。

だけど未練が残る。」

何の未練？

そう問うとあなたは苦笑いを浮かべ。

「救えるものを救えなかったという未練。」

あなたは確かにそう言った。

俺はあなたのその言葉を反芻して。

斬るのを止めた。

あなたは驚きの表情を浮かべてたね。

だって俺は決めたんだ。

あなたを何があっても守るって。

守ってみせるって。

死に急いでるあなたを斬るのはごく簡単な事で。

聖剣をふりあげてもあなたは瞳を閉じて抵抗すらしないだろう。

あなたが抵抗するのはただ抱きしめた時だけ。

苦しげな表情で腕を懸命に張るんだ。

…何かエロ親父みたいだけど。

俺はあなたを抱きしめたいって思ったんだ。

聖剣を手に入れて 2

俺の町はもう半年近くになるだろうか。
魔族の襲来で壊滅状態に陥った。

俺が生き残ったのは両親のお陰で。
両親は俺を井戸に隠し言った。

「お前だけでもどうか生き延びて。」

その悲痛な叫びは断末魔の声と共にかき消された。
だってその時魔族は言ったんだ。

「人間を根絶やしにしろ。勇者が現れる前に殺すんだ。」

俺の住んでた町は勇者が現れて聖剣を突き刺して逝った町だと言われている。

聖剣は伝説通り町外れの噴水に突き刺さっていて。
古びていて。
でもその隣りに石碑があった。

「これを抜けた者を次代勇者と認める。」

毎年15になった者が力試しのために聖剣を抜く行事があった。
でも今まで誰も抜けた者はいない。
そして俺は。

俺はまだ5歳で。
聖剣のある場所にすら行った事もなく。
まさか自分が抜けるだなんて思いもしなかった。

俺は両親を殺されて。

魔族が去ってから途方に暮れ。
フラフラと町外れまで行つたんだ。

この辺に優しかった兄ちゃんの家があつて。

この辺に花売りの美人の姉ちゃんが住んでて。
5歳の俺は子供の思考で。

ただただどうしていいか判らずに。
聖剣を抜いたんだ。

その時目映い光が聖剣から刺して。

俺は急激に大人の体になった。

まるで天から光が降つてるみたいに。

俺は聖剣を握り締め。

余りの状況に立ちすくんだ。

そして声が聞こえた。

「さあ。来なさい。私たちの元へ。」

その声を聴いた瞬間俺の意識は遠くへと…。

癒しのヒーリア 1

変な話だけど幽体離脱っていうの？

そんな感じで俺の意識は遠く遠く離れた場所に飛ばされた。

あの声は何だったんだろう？

そう思いながら。

大人になった自分の体を遥か下へと見ながら。

空を飛んだ。

半透明の自分の姿は自分でも触れないくらい半透明で。

でも痛覚はあつて。

空を劈く風は痛かった。

「此処は何処？」

自分の意識が全くもって通じない意識が全く働かない状態で連れてこられた所は。

一回だけ父に連れてきてもらった事のある洞窟だった。

「勇者クーラン。」

声がする。

何で俺の名前知ってるの？とか。

当然の疑問は口から付いて出なかった。

目の前に現れたのは。

水色の女の人だった。

「私はヒーリア。癒しのヒーリア。」

「あなたは誰なの？」

それは当然の疑問で。

でもそれを言う前に。

ヒーリアは僕を抱きしめた。

「勇者……。私はお待ちしてました。こんなに立派な青年が勇者だなんて。」

「ちよつ……。ちよつと待つてよ。」

俺はヒーリアの腕の中で暴れて。

ちよつと何なの？

そう思った。

「俺は今まで5歳の子供で。」

言いながら自信がなかった。

俺の声すら声変わりして低い男の声になっていたから。

「両親が死んじゃったし。どうして良いか判らなくて!!」

堰を切ったかのように涙が溢れた。

俺は別に勇者になりたかったわけじゃなかった。

両親と皆で精一杯仲良く暮らせればそれは凄く幸せな事だし。

「……知ってたよ。勇者クーラン。」

あなたが向かう闇も見える。」

ヒーリアはそう言っで。

俺みたいに涙を流した。

「私はね。あなたに伝えたいことがあったからあなたを呼び寄せたんだ。」

癒しのヒーリア 2

「クーランが5歳の子供ならきつとわからないだろうけど。」

ヒーリアは俺を抱きしめたまま呟くように言葉をつむぐ。

「お父さんとお母さんが愛し合ってクーランは生まれてきたの。判る？」

俺が涙を拭いながら頷くと。

それを確かめながらヒーリアは続ける。

「私は十数年前に可愛い可愛い赤ちゃんを生んだの。」

それがどうしたの？と視線を向けると。

「でもね。私の旦那さんって言うのは……悪い奴だったの。」

ヒーリアは悲しそうに。

俺の髪を撫でた。

「悪い悪い魔王だったの。」

ヒーリアは俯いて。

「魔族はね。人間が大嫌いだから殺したいんだけど。」

魔王だけはちょっと違って私を苦しめるために子供を生ませたの。

「

だけど昔から訊いてた話は魔王は何処かずっと遠くで先代勇者に封印されてるって？」

そう言うときヒーリアは黙って頷いた。

「そうよ。でもね私のこと魔王は好きなわけじゃなかったから子供だけ連れて行ってしまった。」

私はそこで魔族に殺されたわ。」

俺が驚いて見ると。

ヒーリアには足がなかった。

「そうよ。私は血だらけで赤ちゃんを返して欲しいって願いながら殺されたわ。」

私の旦那は魔王ルシファア。そしてその赤ちゃんが大きくなってから勇者に封印されたの。」

「どうして？」

だつて俺を呼び寄せて。

あなたは何でも見えるって。

「私は無念しか遺せずに死んだわ。」

でも気付くと癒しの魔法を使えるようになってたの。

それは勇者クーランに魔法を教えるため。まだ死ねないって。」

俺が見つめると。

ヒーリアは手をかざした。

「あなたがちゃんと自分の年齢に追いつく思考になるまで修行をつけてあげるから。」

そしてヒーリアは俺に牙を向いた。

フェリシティ

俺は思わず聖剣を掴んだ。

それは咄嗟の事だった。

「勇者クーラン。あなたの名前私が知ってるの不思議だと思わなかった？」

俺に攻撃を仕掛けながら。

ヒーリアは言う。

俺は必死で避けながら言葉をつむいだ。

「知ってるから知ってるんでしょう？」

俺は確かに名前を呼ばれたとき驚いたけど。

それ以上に自分が光を受けて大人になっちゃって。

両親は殺されて自分だけ生き残って。

聖剣を抜いて。

驚く事ばかりで。

どうして問える？

俺の疑問はただ1つ。

俺がどうして勇者になっちゃったのだったのかって事。

俺だけどうして生き延びちゃったかって事。

「魔族に殺された人って人一倍末練が強くて。

だからあなたが生まれるのをずっと待ってたんだ。

先代勇者が残した言葉に次の勇者はクーランって名前だって。

だから。」

「随分とはた迷惑な話ですね。

俺の運命はもうその時から決まってたんだ。
両親が殺されるのも俺だけ生き延びる事も全部判ってたんだ。」

自嘲の笑みがこぼれる。

「生まれてなんか来なければ良かった。」

そして叫ぶ。

どうして俺だけ。

どうして俺だけこんな辛い思いをする？
どうして俺だけこんな嫌な思いをする？

「俺が此処で死んだら呪縛から解放される？」
そう呟いて俺は聖剣を自分に刺した。

ヒーリアは泣いていた。

涙を拭いてもせず。

ただ俺を見つめていた。

苦しかった。

辛かった。

もうどうでも良かった。

初めは復讐に燃えたけど。

所詮叶わない夢なんて追いかけないほうが絶対良い。
傷つくこともないし。

そして初めから諦めてれば辛い事だってないはず。

自分で刺した傷はどんどん癒えていく。

「あなたは死ねないから。」

ヒーリアが近づいて。

魔法をかける。

綺麗な水色の魔法。

「この魔法ヒーリアって言うんだ。

私の人間だったころの名前はフェリシティ。よく覚えていて。」

そこで記憶は途切れた。

ラピスラズリ

気づくと俺は町外れの森の入り口に佇んでいた。

此処は魔族の巣窟だ。

近所の兄ちゃんが言ってた。

よく町の人々が殺されるから近づいちゃいけないと。

俺の自分で刺した傷は跡が残っていて。

それだけであれが夢じゃない事を悟った。

あの水色の女の人は。

未練だけで生霊になっていた。

そして。

俺に未来を託した。

どうして俺だけ？

今でもその思いは消えないけど。

こうして生きてる以上何かを残さないといけないと思う。

勇者の剣を抜いた以上。

何かを背負って生きていかなければならない。

「こつちよ。」

俺は声に導かれ。

ピーシアさんのアジトに着いたんだ。

そして驚いたのはピーシアさんが口笛で呼び寄せた飛竜の名前が。
「フェリシテイ」だったこと。

そしてピーシアさんは生き急いでいて。
でもこの小さな飛竜に情けをかけ。
名前を付けた。

フェリシテイって幸運って意味。

一体どんな思いであなたはこの子に名前を付けたんだろう？
人間になりたかったあなたは口付けて最後の別れを言った。

人間になりたかったあなたは紫色の血を流し。
俺に刺された。

俺の腕の中で絶命をする瞬間に微笑んだ。

「私も人間に生まれたかった。」

「でもこれで未練を残さずに死ねる。ありがとう。勇者クーラン。」

俺はね。最初から知ってたんだ。

ヒーリアのお陰でヒーリアの残した娘がピーシアさんで。

魔王を継承して。

だけど一言だってピーシアさんには言わなかった。

魔王はあなたですって。

それはあんまり酷過ぎるから。

だから気づかない振りをして。

出来ない約束をした。

「ピーシアさん。この旅が終わったら見せたいものがあるから一緒に来てください。」と。

あなたは判った振りをして頷いたね。
本当は。

そんな日が来ない事も知ってたね。

俺は辛くなかった訳じゃない。

涙は枯れてしまっぐらい泣きたかった。

だけどあなたの生き様を見ると不思議と泣いてる場合じゃない
って思ったんだ。

どうかあなたのように優しい心を宿らせて。

その伝説で生まれた宝石がラピスラズリだと言う。

ラピスラズリ（後書き）

クーラン編終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8278e/>

The Brave is warm-hearted.

2010年10月17日05時06分発行